

..... は し が き .....

## 白鳥の詩をつくろう

日本白鳥の会会長 家田 三郎

この会の会長という名誉ある役割を仰せつかり、設立総会の当日には“宿命”という私自身の卒直な気持ちを申し上げます。

本田清、松井繁氏などの方々、早くからこうした協議会ともいべき組織づくりを計画されていることは、つとに本田氏からお知らせいただき、私のような者も何かお手伝いを申し上げるべきだと考えておりました。

そして発会の当日、皆々様のお話をうかがって、こんな教示深い有意義な、しかも楽しいお話は今までになかったと思い、参会さしていただいた幸福を思いました。さらにこの会が楽しくつづくことを祈りました。

当日も申し上げたことでありますが、皆々様が、白鳥のように見え、しかもその白鳥が、その土地その土地の「サイゴベン」を語っている。そんな風にも思いました。

日本の人間として、私共は「ツバメ」を大切にしたい思いはありますが、これはどうも、「おかみ」の命令もあつたかのようにも思われます。こんどの白鳥こそ、私ども貧しい者が大切にしようという、いわば庶民からの発想と申し上げてもよいようにも思いました。

当日のお話の中に、尾岱沼の何千羽の白鳥が一夜で帰ってしまうとか、環境庁の示した統計によれば、日本には1万6千の白鳥が数えられたとか、これ等は、この会のこれからの運命を語っているようにも思いました。

白鳥を大切にするという事は、恐らく森や林や周囲の自然を大切にすることだと思ふのでありますが、白鳥のくるような田舎の淋しい水辺に住むわれわれが、案外、日本の運命と、かわりが深いものだとも感じております。

そう申し上げては失礼かとも存じますが、貧しきわれわれこそが、いつまでも日本の人びとの心に残る“エトランゼ・白鳥の詩”をつくろうではありませんか。

白鳥に耳をかたむけ盲の子

( 医師・水原町博物館長・瓢湖の白鳥を守る会会長・67歳 )

## 「日本白鳥の会」設立総会の記録

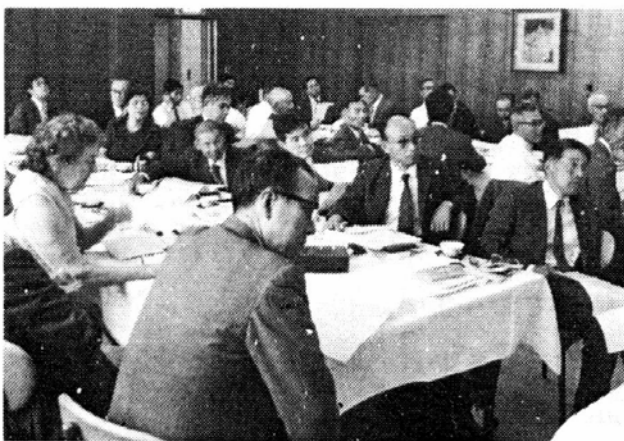
日本に渡来する白鳥を保護し、その生態を窮めようとする多くの人たちの情熱と協力が実って、昭和48年6月24日(日)東京四ツ谷駅前の主婦会館において、日本白鳥の会が結成された。当日は、全国自然保護連合理事長中村芳男氏、モア・ジョイ会理事長ローゼ・レッサー女史(法大・日大講師)等の来賓もあり、北は北海道から南は四国までの有志40名が参集し会則、役員等を決めたのち活発な情報交換を行った。

当日はまず、発起人のひとり本田清氏(新潟)が開会のことばを述べ、同じく松井繁氏(北海道)がこれまでの経過をくわしく説明した。つづいて参加者の自己紹介が行なわれたが、情報交換までの日程が待ち切れずに、やむにやまれぬそれぞれの担当地区の実情が紹介されるなど、当初からほとばしり出る熱情が感じられた。

議長に松井繁氏を選出し、会則案を審議、起草者の本田清の提案理由を一部訂正のうえ

別稿のように制定された。役員選出は各地代表による選考委員により行なわれ、別稿のように決定したが、顧問の委嘱については、新役員に一任された。

新会長の家田三郎(新潟)は、「はしがき」のような会長就任のあいさつを述べた。当年度の事業、



2人の来賓(左席)

左からローゼ・レッサーさん(モア・ジョイ)

中村芳男(全国自然保護連合)

右側席に吉川繁男氏(瓢湖)も見える



設立総会までの経過を述べる

松井 繁 氏(札幌)

予算案については、準備段階での見通しが立たなかったため、現有予算のなかでできる限りの努力をすることです承された。しかし、来るべきシーズンの重点調査目標として、(1)ハクチョウ類の定時定点観測と(2)、ハクチョウ類の渡来地における環境保全とその保護区の範囲の設定について」の2点について調査研究活動を強めて行くことを確認するとともに、国際白鳥会議の日本開催の基礎づくりをしていくことを了承した。

最後に別稿記録のような各地の資料および情報交換が行なわれたが、それぞれの地域での特殊事情や、保護活動に対する考え方が述べられると同時に渡来の状況等がくわしく発